

光源氏、中流の人妻目当てに空蟬の寝所に忍び込む(源氏物語・帚木)

「雨夜の品定め」の折に光源氏は、「中の品」の女性に興味を持つようになった。さっそく、方違えを口実に中の品の女のいる家に強引に押し掛けた。伊予の介という好色な老人の若い後妻にあたる空蟬うつせみに目をつけ、ちようどその女のいる近くに陣取って夜を過ぐすことにしたが、女のこと気がなくなって眠れないでいる。

君は、¹とけても寝られたまはず、いたづら臥しと思さるるに御目覚めて、この北の障子のあなたに人のけはひするを、「こなたや、かくいふ人の隠れたる方ならむ、あはれや」と御心とどめて、やをら起きて立ち聞きたまへば、ありつる子の声にて、

「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」

と、かれたる声のをかしきにて言へば、

「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されど、け遠かりけり」

と言ふ。寝たりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれば、いもうとと聞きたまひつ。

「廂にぞ大殿籠もりぬる。音に聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ」と、みそかに言ふ。

「昼ならましかば、覗きて見たてまつりてまし」

とねぶたげに言ひて、顔ひき入れつる声す。「ねたう、心とどめても問ひ聞けかし」とあぢきなく思す。

「まろは端に寝はべらむ。あなくるし」

とて、灯かかげなごすべし。女君は、ただこの障子口筋交ひたるほせにぞ臥したるべき。

「中将の君はいづくにぞ。人げ遠き心地して、もの恐ろし」

1 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。
2 「かくいふ」源氏はすでに空蟬の話を知っている。また、「ありつる子」というのが先ほどこ会った空蟬の弟である。
3 源氏は身分も高く有名人だという源氏物語の基本設定
4 この発言には「おぼす」と敬語が使われているが、誰がどう思ったのか
5 中将はここでは女房の名(身内の役職名で呼ばれていた)

と言ふなれば、長押の下に、人びと臥して答へすなり。

「下に湯におりて。『ただ今参らむ』とはべる」と言ふ。

皆静まりたるけはひなれば、掛金を試みに引きあけたまへれば、あなたよりは鎖ざざりけり。几帳を障子口には立てて、灯はほの暗きに、見たまへば唐櫃だつ物をも置きたれば、乱りがはしき中を、分け入りたまへれば、ただ一人いとささやかにて臥したり。なまわづらはしけれど、上なる衣押しやるまで、求めつる人と思へり。

「中将召しつればなむ。人知れぬ思ひの、しるしある心地して」

どのたまふを、⁹ともかくも思ひ分かれず、物に襲はるる心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて、音にも立てず。

「うちつけに、深からぬ心のほせと見たまふらむ、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも、聞こえ知らせむとてなむ。かかるをりを待ち出でたるも、さらに浅くはあらずと、思ひなしたまへ」¹⁰

と、いとやはらかにのたまひて、鬼神も荒だつまじきけはひなれば、はしたなく、「ここに、人」とも、えののしらず。心地はた、わびしく、あるまじきことと思へば、あさましく、

「人違へにこそはべるめれ」と言ふも息の下なり。消えまごへる気色、いと心苦しくうたげなれば、をかしと見たまひて、

「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもお

6 女房達(人々)も主人である空蟬から離れて長押の下だから隅のほうに? 寝て応答しているらしい。
7 思うに敬語が使われてもいないし、文脈から女空蟬は中将を呼んでいたのだから、入ってきた人物が女房の中将だと思つたのである。
8 源氏も「中将」であり、この湯に行つた女房も夫の役職で「中将」と呼ばれているので偶然とは思えないと口実を使つたのだ。
9 もちろん男の声だつたから侵入者に気づいて驚いたので。
10 これは口説き文句ですが、訳せますか。もちろん今日聞いたばかりなのに「年ごろ思ひわたる」なんて嘘ですわ。

ぼめいたまふかな。好きがましきさまには、よに見
えたてまつらじ。思ふことすこし聞こゆべきぞ」¹¹

とて、いと小さやかなれば、かき抱きて障子のも
と出でたまふにぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。
「やや」どのたまふに、あやしくて探り寄りたるに
ぞ、いみじく匂ひみちて、顔にもくゆりかかる心地
するに、思ひ寄りぬ。あさましう、こはいかなること
ぞと思ひまほはるれど、聞こえむ方なし。並々の人な
らばこそ、荒らかに引きかなぐらめ、それだに人
のあまた知らむは、いかがあらむ。心も騒ぎて、慕ひ
来たれど、動もなく、奥なる御座に入りたまひぬ。

障子をひきたてて、「暁に御迎へにものせよ」どの
たまへば、女は、この人の思ふらむことさへ、「死ぬ
ばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いと惱
ましげなる、いとほしけれど、例の、いづこより取
う出たまふ言の葉にかあらむ、あはれ知らるばかり、
情け情けしくのたまひ尽くすべかめれど、なほいと
あさましきに、

「現とおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思し
くたしける御心ばへのほども、いかが浅くは思うたま
へざらむ。いとかやうなる際は、際とこそはべなれ」
とて、かくおし立ちたまへるを、深く情けなく憂
しと思ひ入りたるさまも、げにいとほしく、心恥づ
かしきけはひなれば、

「その際々を、まだ知らぬ、初事ぞや。なかなか、
おしなべたる列に思ひなしたまへるなむうたてあり
ける。おのづから聞きたまふやうもあらむ。あなが
ちなる好き心は、さらにならはぬを。さるべきにや、
げに、かくあはめられたてまつるも、ことわりなる
心まほひを、みづからもあやしきまでなむ」
なぞ、まめだちてよろづにのたまへど、いとたく

¹¹ 源氏は自分が迫るのを単なる好色ではないと言っているのだ
¹² 源氏がいつも(例の)せのようであると表現されているのか
¹³ 一般的な好色心じゃないよと言っているわけですね。

ひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむこ
とわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えた
てまつるも、さる方の言ふかひなきにて過ぐして
むと思ひて、つれなくのみもてなしたり。人柄のた
をやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹
の心地して、さすがに折るべくもあらず。

まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを、
言ふ方なしと思ひて、泣くさまなぞ、いとあはれな
り。心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しから
まし、と思す。慰めがたく、憂しと思へれば、

「なぞ、かく疎ましきものにも思すべき。おぼえ
なきさまなるしもこそ、契りあるとは思ひたまはめ。
むげに世を思ひ知らぬやうに、おぼほれたまふなむ、
いとつらき」と恨みられて、

「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしながら
の身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじ
き我が頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ
慰めましを、いとかう仮なる浮き寝のほぞを思ひは
べるに、たぐひなく思うたまへ惑はるるなり。よし、
今は見きとなかけそ」

とて、思へるさま、げにいとことわりなり。おろか
ならず契り慰めたまふこと多かるべし。

鶏も鳴きぬ。人びと起き出でて、

「いとどぎたなかりける夜かな」「御車ひき出でよ」

なぞ言ふなり。守も出で来て、

「女なごの御方違へこそ。夜深く急がせたまふべ
きかは」なぞ言ふもあり。

君は、またかやうのついであらむこともいとかたく、
さしはへてはいかでか、御文なごも通はむこととい
どわりなきを思すに、いと胸いたし。奥の中将も出
でて、いと苦しければ、許したまひても、また引きと
どめたまひつつ、

¹⁴ 女のほうはせのように対処しようか決めたようですね。なん
となく常識的にわかります。

「いかでか、聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさも、あはれも、浅からぬ世の思ひ出では、なまなまめづらかなるべき例かな」

とて、うち泣きたまふ気色、いとなまめきたり。鶏もしばしば鳴くに、心あわたたしくて、

「つれなきを恨みも果てぬしののめに　とりあへぬまでおせろかすらむ」

女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまはゆき心地して、めでたき御もてなしも、何ともおぼえず、常はいとすすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方の思ひやられて、「夢にや見ゆらむ」と、そろ恐ろしくつつまし。

「身の憂さを嘆くにあかで明くる夜は　とり重ねてぞ音もなかれける」

ことと明くなれば、障子口まで送りたまふ。内も外も人騒がしければ、引き立てて、別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。

御直衣など着たまひて、南の高欄にしばしうち眺めたまふ。西面の格子そそき上げて、人びと覗くべかめる。簀子の中のほどに立てたる小障子の上より仄かに見えたまへる御ありさまを、身にしむばかり思へる好き心どもあめり。

月は有明にて、光をさまれるものから、かげけざやかに見えて、なかなかをかしき曙なり。何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすぐくも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、言伝てやらむすがだになきをど、かへりみがちにて出でたまひぬ。